

私の履歴書

前橋 汀子

「やっと安心して聴けるようになったわ」。この春、演奏会に来てくれた95歳の母が言った。「安心してってどういうこと」と聞くと「休憩時間にちゃんとトイレに行ったらしくとか、そんな心配ばかりしていたのよ」と言っから2人で大笑いした。

ソリス ト

と。空襲で近所が燃えていた。

「子供は防空壕に置いてこいと言っただろう」。周囲から何度も怒鳴られながら、母は1歳半の長女、汀子を背中から下ろそうとしなかった。決死の覚悟でバケツリレーの列に並んでいると、あることが爆弾が防空壕を直撃した。子供たちは全員亡くなったと

不思議な出会いに導かれ

ソ連に留学 まさに幸運

背負って歩くようになると思わなかっただろう。5歳の頃、母に手を引かれて小野アンナ先生のお宅を訪ねた。人生最初の大きな転機だった。アンナ先生は帝政ロシアの貴族出身で、革命の混乱を逃れて来日したバイオリニストだ。初めて会った外国人を前におじけづいた私は、先生に「年はいくつ」と尋ねられても、右手を広げて見せ

①
るのが精いっぱいだった。ソ連でバイオリンを勉強したい。私が強くそう願うようになったのも、アンナ先生の門下に入ったからだ。来日した巨匠、オイストラフの演奏を日比谷公会堂で聴いたことも大きかった。「ソ連で勉強すればオイストラフみたいになれるようになるかしら」。

東西冷戦の時代だ。私は何の

囲のレベルの高さに打ちのめされた。自分がバイオリンをやっても意味がないのではなにか。暗く落ち込む日が続く。「そんなに泣いてばかりいると、ティコの涙で湖ができるよ」。級友が詩的な言葉でなぐさめてくれた。「君ねえ、絶対に人と比べたことは、後になって身にしみて分かった。しかし若い私は人と比べて落ち込み、涙に暮れたのだった。戦後間もない混乱の時代からバイオリンを習ってはいたが、父は高校教師、母は専業主婦で、音楽とは無縁の人だった。私にも特別な才能はなかった。



最近の筆者

私がソリス

トとして今に至るのは、多くの方の導きと奇縁ともいうべき不思議な出会いに恵

たらいけないよ」。桐朋学園「子供のための音楽教室」や桐朋学園女子高等学校音楽科でお世話になった恩師、斎藤秀雄先生が留学前にかけてくださった言葉を思い出す。当時、私は少しムツとしたのを覚えているが、ソ連には私より上手な学生がたくさんいることを見越しての忠言だ（バイオリニスト）

題字も筆者